

中振北遺跡第8次調査 現地説明資料

調査地 枚方市北中振三丁目
 調査原因 光善寺駅西地区第一種市街地再開発事業
 調査期間 令和7年8月8日～12月31日(予定)
 調査面積 約370㎡
 調査主体 枚方市観光にぎわい部文化財課 (担当 井戸竜太・堂ノ本智子)

1. はじめに

今回の発掘調査は、光善寺駅西地区の再開発に伴い実施しています。中振北遺跡は、令和元年(2019)に京阪本線の連続立体交差事業に先立つ試掘調査で発見された中世を主とする遺跡です。今回の再開発事業においては、令和4年から開発工事と同時に本格的な調査を進めてきました。今回の調査は、駅西地区の再開発で3回目、遺跡全体では8回目となります。遺跡内でのこれまでの調査では、古墳時代後期頃には土地利用が始まり、奈良時代(8世紀)頃には宅地化が進み、中世には共通の方位で町が整備されてきたことが明らかとなってきました。この町は、後にいう河内街道とそこから西の淀川へと延びる東西道沿いに発展したものとみられます(図1)。

2. 調査成果

今回の調査においても、平安時代後期から室町時代(11世紀後半から15世紀)頃にかけてと推定される建物の柱穴・井戸・区画溝からなる中世・街道町の一画を発見することができました(図2)。調査区東部で見つかった南北方向の溝は、幅2m・深さ80cmと規模が大きく、長さは17m以上あり、調査区外の南側へと延びています(写真6)。宅地を区画する主要な溝で、北側には土橋状の通路が設けられているようです。区画溝の西側に平行する柱穴の列(柵または塀)や溝も宅地内の区画でしょう。区画溝は、出土遺物から鎌倉時代後半～室町時代初め(13世紀後半～14世紀)頃には機能していたと考えられます。調査区の中央部から西部では、建物の柱穴や井戸が数多く重なり合う状況を確認しました(写真1)。建物の柱穴は、調査区の北西部に密集しており、建

物が複数回建て替えられたことがわかります。井戸は、調査区の北部(SE1・7・8)と中央部(SE23・24・29)でそれぞれ3基ずつ重なっており、平安時代後期から室町時代頃にかけて連綿と造り変えられてきたとみられます(写真7)。井戸SE1とSE29では一辺80cm程で方形の縦板組みの井戸枠が、井戸SE23では直径60cm程で桶状の井戸枠が良く残っていました。これらの建物の柱穴や井戸が同じ個所で重なる状況は、町内がエリア毎に使い分けられ、人口が集中する都市的な町へと発展した様子を示すものと理解されます。出土遺物には、土師器や瓦器の食器類・煮炊具、須恵器の鉢・甕などの日常生活道具類のほか、漆器碗や中国からもたらされた青磁や白磁といった当時の高級品も含まれていることから、この町に住む住民の経済力の高さが窺い知れます。

3. まとめ

今回の遺構・遺物の検出状況からは、街道町が中世前半段階から始まっていたと理解できます。中世の半ば～後半には、町が淀川側へも広がり、堺・京都・奈良などの中継地的な街道町として発展を遂げていたようです。この町の地理的位置と中世の都市的な発展に目を付けた浄土真宗の蓮如が出口御坊(光善寺)を建立し、当地を布教の拠点としたのでしょう。この町の歴史は、出土遺物から中世以前に遡るようで、その成立と発展過程の解明に向けて今後の調査がさらに重要となります。(井戸)



写真1 建物の柱穴や井戸が密集する様子 (西から撮影)

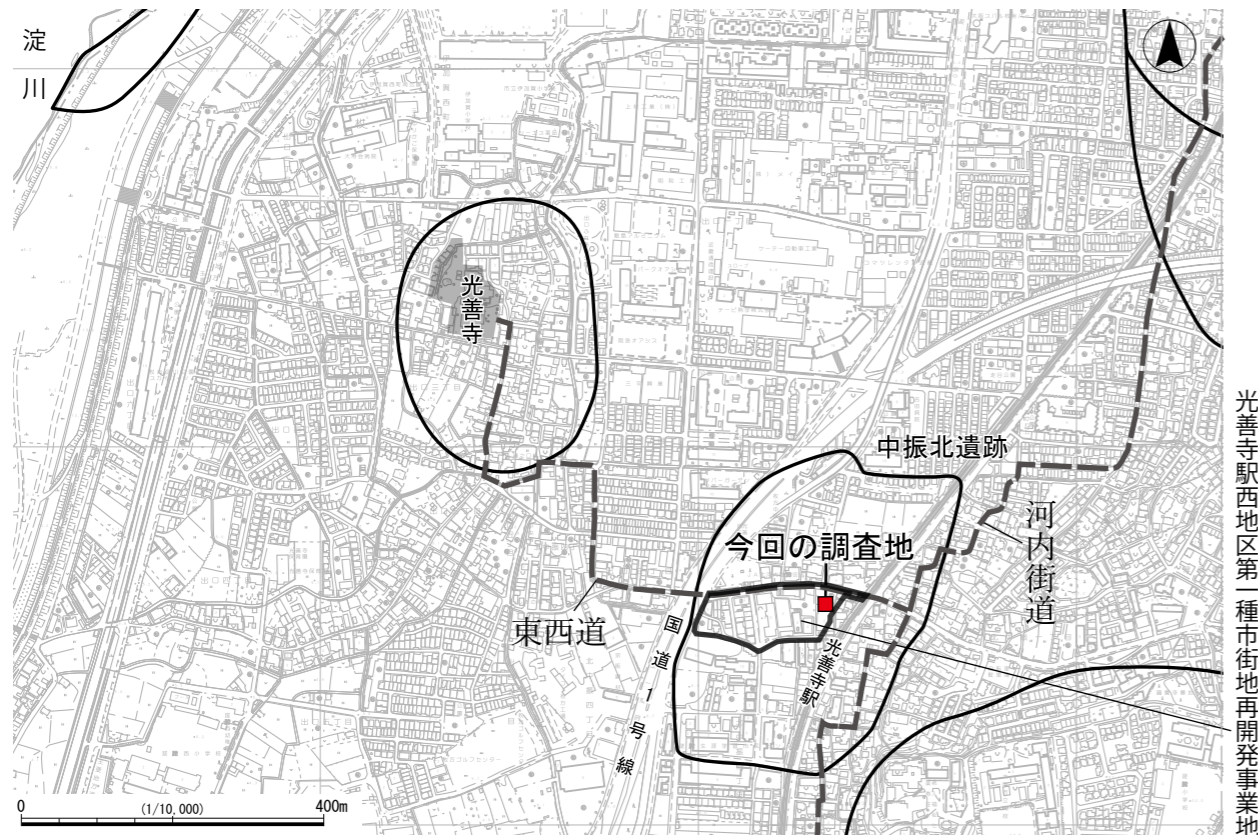


図1 中振北遺跡 調査地位置図

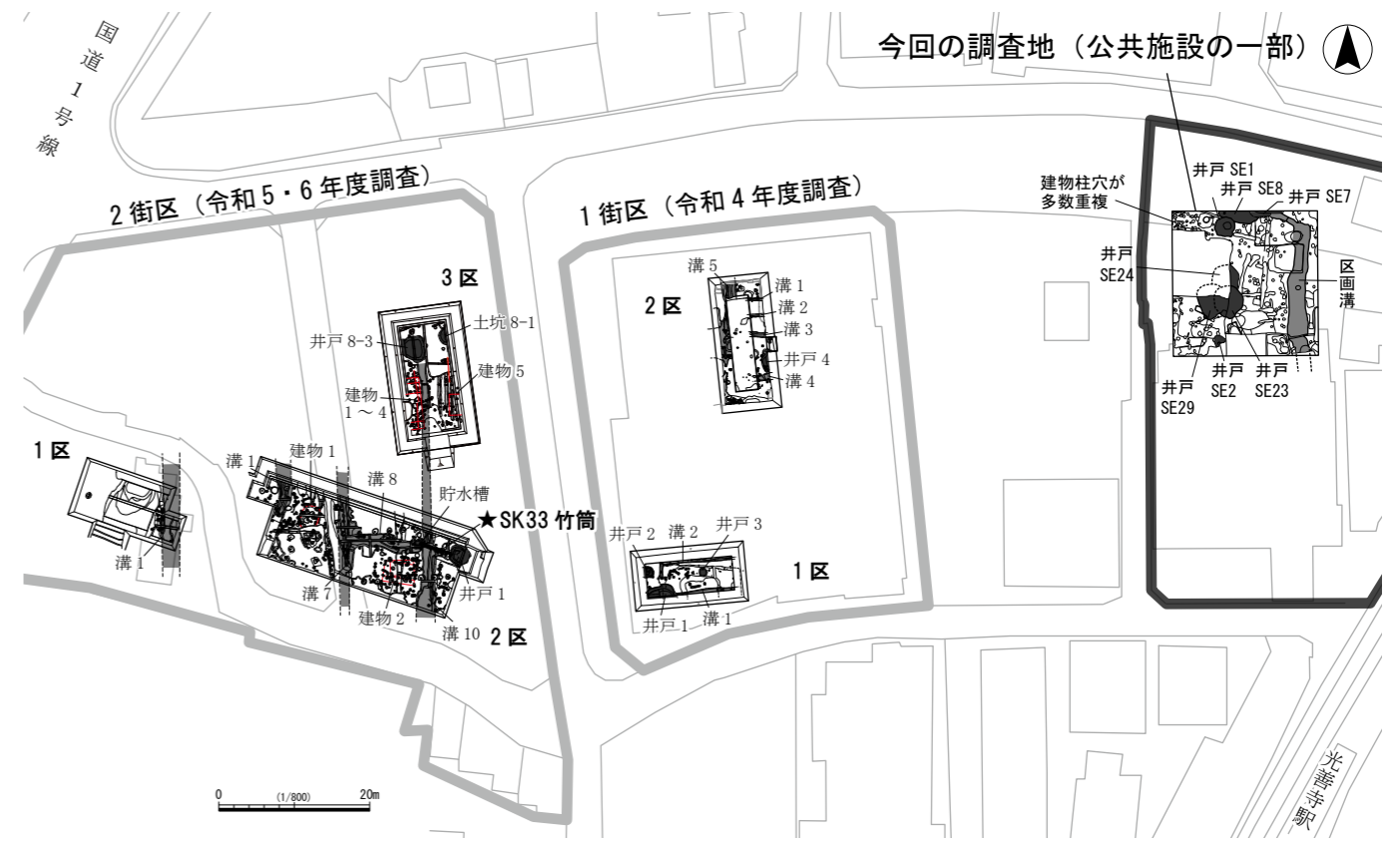


図2 光善寺駅西地区第一種市街地再開発事業に伴う発掘調査 遺構平面図

駅西地区再開発でのこれまでの調査写真（令和6年3月撮影）



写真2 2街区2区 開発工事と発掘調査が進む光善寺駅西地区（北から京都方面を望む）



写真3 2街区2区 方形の区画に配置された建物2（北から撮影）

写真4 2街区2区 井戸1と貯水槽が竹筒SK33で繋がった浄水施設（東から撮影）



今回の調査写真（令和7年10月撮影）



写真5 調査区の全景写真（東から撮影）



写真6 区画溝（南から撮影）



写真7 調査区中央部で3基の井戸（SE23・24・29）が重なる様子（西から撮影）